

平成31年3月

茨城森林管理署長 岡井芳樹

はじめに

国土緑化推進運動の中心的な行事として天皇・皇后両陛下のご臨席のもと、毎年盛大に開催される全国植樹祭（去年は福島県、今年は愛知県）、近年ではテレビ放送もされるなど広く国民に知られるようになっていますが、その原点を皆さん御存知でしょうか。

実は、その発祥の地は茨城県！今でこそ世界的にも豊かな森林に覆われている我が国ですが、戦中戦後の山は非常に荒廃しており、台風や大雨の度に大きな被害が発生していました。農山村は疲弊し、森林資源は劣弱、膨大な量の外材を輸入していた昭和初期、そのような荒れた国土を保全し、森林資源を充実させようという高邁な思いの高まりにより、大日本山林会が中心となって植林を推進する全国的な緑化行事を催すことが提唱され、昭和8年に「愛林日」が設定されます。翌昭和9年に初めて全国的な植樹行事が茨城県筑波山麓の国有林で行われました。この愛林運動は昭和19年まで続けられ、太平洋戦争を挟み、それを引き継ぐ形で昭和25年から「全国植樹祭」が始まるのです。



写真1 全国緑化行事発祥の地の記念碑（茨城県桜川市真壁町鬼ヶ作国有林）

—徳川宗敬*1 国土緑化推進委員会理事長（当時）の揮毫—

茨城森林管理署の概要

このような全国植樹祭とも関わりの深い茨城森林管理署、その管轄区域は茨城県下一円の国有林（1県1署）で署としては平均的な約4万5千ヘクタールの面積を管轄しています。茨城県は、中南部に広大な農地が広がっていて、湖沼も多いため、森林率は県土面積の約3割、国有林はその4分の1ほどですが県北地域に集中しており、その大部分がスギ、ヒノキなどの人工林となっています。また、森林レクリエーションの場としては、日本美しの森お薦め国有林に選定された奥久慈自然休養林の「日本三大名瀑の袋田の滝^{*2}と新緑・紅葉、奇岩・怪石の男体山」や日本百名山の筑波山などが知られています。

それから、我が国で最初に施業案^{*3}が編成された笠原国有林（現在は当署敷地内）もあります。

変わったところでは、建設用骨材等として利用される山砂利・山砂と呼ばれる真砂土や花崗岩（いわゆる御影石）等を採取する採石事業もさかんで、十数社が地域環境等に配慮しながら事業を行っています。



写真2 凍結した袋田の滝



写真3 我が国初の施業案（森林の経営計画）が編成された笠原国有林跡地に建つ石碑
—後ろが茨城森林管理署庁舎、右奥は茨城県庁—

8割が人工林！全国屈指の木材供給力！！

茨城森林管理署の特徴として、国有林の人工林割合は全国平均では3割ですが、当署はなんと8割！路網整備も進んでおり、多くの高性能林業機械を保有する生産能力の高い林業事業体などに支えられ、署単位での伐採量は全国一。それでも成長量が伐採量を大きく上回っているため森林資源（森林の蓄積）は着実に増加しています。

また、10年ほど前の平成19年、県南の神栖市に業界 NO.1 といわれる中国木材(株)が進出、鹿島工場が竣工され、大型の乾燥・製材工場、集成材工場、プレカット加工施設、木質バイオマス発電所が整備されました。このことをきっかけに、茨城県全体の林業・木材産業の再編・集約・振興を図ろうとする機運が高まり、森林資源に近いという立地を活かし、県北地域の常陸大宮市と常陸太田市にまたがる宮の郷工業団地に一大木材産業団地が整備されています。本団地には、原木市場、木材乾燥施設、ラミナ製造施設、木材チップ製造施設、プレカット加工施設、製材加工流通施設、木質バイオマス発電所、木材展示・研修施設などの木材を隅から隅まで扱える木材産業関連施設が集積し、茨城県の林業・木材産業の中核となっています。



写真4 原木市場、製材工場、木質バイオマス発電所などが集積する宮の郷工業団地

産学官との密接な連携により林業成長産業化を牽引

茨城県の特色として、つくばに代表される研究学園都市がありますが、森林・林業・木材産業に関する学術研究部門でも、我が国最大の総合的な試験研究機関である森林総合研究所がそのつくば市にあるほか、遺伝的に優れた特性をもつ林業用種苗の品種開発、先端技術を用いた育種期間の短縮、遺伝資源の収集・保存、林木育種の海外協力などを行う林木育種センター・森林バイオ研究センター（日立市）や、関東森林管理局の試験研究機関である森林技術・支援センター（笠間市）があります。

茨城森林管理署では、これらの試験研究機関と連携し、研究・実証等のフィールドを提供するとともに、様々な課題について意見交換を行い、開発された新たな技術や知見について現地検討会等を通じて地域に普及しています。

平成30年度には、県内外の民有林関係者や事業者、国・県・市町村等の行政機関・団体、研究機関等を幅広く集めて、「一貫作業システムとコンテナ苗植栽現地検討会」と「採材・生産性向上現地検討会」を開催しました。

茨城森林管理署では、様々な工夫や現場の実体験に基づく活きた議論により林業の低コスト化・生産性向上を推し進め、これから本格化する主伐・再造林の時代、すなわち、伐って、使って、植えるサイクルが大きな流れとなって動き出せるよう、さらには、事業者が儲かり、事業者が若者を雇用し若者が地域に定着し、山元の森林所有者にお金が返っていき、再造林がスムーズに行われ、森林を管理する中山間地域がもっともっと活気づいて元気が出るよう、様々な活動に日々意欲的に取り組んでいます。



写真5 一貫作業システムとコンテナ苗植栽現地検討会



写真6 採材・生産性向上現地検討会

林業の未来を切り拓く様々な取組

我が国の人工林の多くは本格的な利用期を迎えようとしており、新たな木材需要のマーケットも形成されつつあります。特にエネルギーの世界では、地球温暖化防止、脱炭素・脱プラスチック社会の構築が急務となっており、県内でもすでに2箇所木質バイオマス発電所が稼働、今後新たな木質バイオマス発電所の設置も検討されています。これらの発電所への素材の安定供給及び同時に発生する素材のマテリアル利用のマーケットの拡大が重要な課題といえます。

また、現在は研究段階ですが、低質材の付加価値を高める可能性のある取組として、森林総合研究所が研究開発に深く関わっている改質リグニン（スギ低質材を原料とする新たな工業原料）については、現在、本格的な製造と実用化に向けた検討が進められています。石油由来の原料に替わる、脱プラスチック化にも通じる持続可能な安定工業材料として、近い将来1,000億円規模の新産業が誕生する可能性を秘めています。

林木育種では、5年で8メートル（注：通常の苗木の2倍以上の生長）にまで育ち、花

粉が少ない特性を併せ持つ第二世代精英樹（通称エリートツリー）が林木育種センターで開発され、その一部は苗木の生産段階に入っており、数年後には植栽できる苗木が世の中に出ていくことでしょう。

林業の ICT 化では、ドローンを活用した様々な調査等の取組とともに、植栽木の成長を阻害するクズを除去するための除草剤散布の試験的实施も平成 31 年度に予定しており、より効率的かつ労働力の軽減に資するスマート林業の実現に向けて積極的に取り組んでいます。

今年は、森林環境譲与税、新たな森林管理システムがスタートする年、民有林での森林整備が少しずつ動き出し、地域材流通の流れが太くなることが期待されます。国有林を預かる茨城森林管理署としては、民国連携により地域の林業・木材産業に活気をもたらし、地域に活力が生まれるよう力を注いでいきたいと考えています。茨城県には幸いまだニホンジカが定着していないので、主伐・再造林がやりやすい恵まれたエリアといえます。ニホンジカが本格的に侵入し造林地が食害等の脅威にさらされることのないよう、関係者に対しニホンジカが森林・林業に及ぼす影響について普及啓発し、その調査・監視を強めつつ、民有林とも連携しダイナミックな林業を展開し、林業・木材産業の成長産業化の具体的な実現を目指し、今後とも積極的・精力的に取り組んで参りたいと思っています。



写真 7 改質リグニン実装車*4 展示発表会の様子

-
- *1 徳川宗敬氏は旧水戸藩主の子孫、東京帝国大学農学部林学科卒、国政では貴族院議員・参議院議員等を歴任、林政では上記国土緑化推進委員会（現機構）理事長、日本林業経営者協会会長等を歴任
 - *2 冬期滝が凍結することで有名
 - *3 森林の状況を把握し、将来誘導する森林の姿を目標として、間伐や造林といった必要な施業を計画するもの
 - *4 車両のボンネット、アームレスト、スピーカーボックス等の内外装部品に改質リグニンを使用